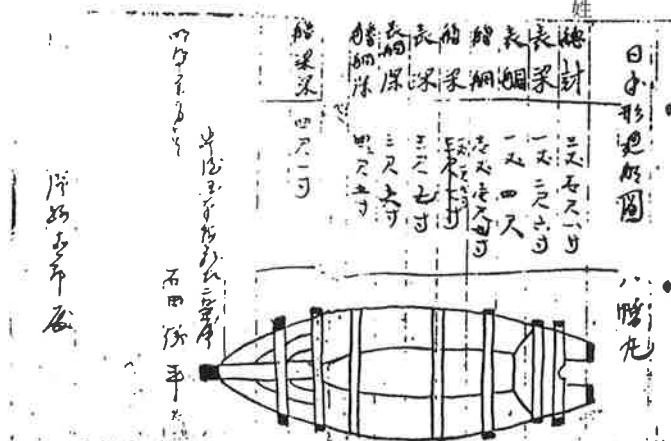


大阪住吉大社石灯籠に刻名されている晞干浦
石田一統と同浦地蔵庵の墓碑について

(片山氏から佐伯史談会に對し
問い合わせがあつた石田一統に関する資料)

野々下 晃

(會員・佐伯市晞干区) 旧石田姓



片山氏蔵

石田一統の墓

平成四年六月発行
佐伯史談一六〇号に
「住吉大社の寄進灯籠
に豊後佐伯領四二浦の
記名」という題で奈良
市に住む日本の碑文の
研究学者、片山清氏が
その碑文によつて大阪
の魚問屋と豊後佐伯領
の網方衆との關係を研
究して同社務所機関紙
「すみのゑ」に論稿中
と報ぜられている。そ
れによると同社域には
多くの石灯籠が立つて
いるがその中の大型
(高さ一〇・八尺)の
碑石一对に延享三年
(一七四六)大阪の天
満屋が願主となり、諸

国の惣網方中、惣船持中、惣商人中三者が寄進者として記名されているという。

なお、網方中の寄進者の中でも豊後の国佐伯領が最も多く、四二浦名が列記されているのみならず、世話人の中に晞干浦石田吉左衛門一統十人と代後浦鶴野小兵衛一統十一人刻名されているともいう。

晞干浦西端海辺に丙午十月（享保十一年一七二六）

小引網が寄進した魚鱗塔や、安永四年（一七七五）地藏庵域に献じた魚鱗塔、また同浦正八幡社に寛政元年九月（一七八九）古引網が献納した旧鳥居のほか明和七年十月（一七七〇）古引網が献納している手水鉢等多くの物証と口碑によって当浦が昔より佐伯領中で先進地として繁栄していた史実についてはかねてより伝承されていた。

しかし、古引網を経営していた石田一統が延享三年（一七四六）の昔から大阪の魚問屋天満屋との交流があったという史実については、今回片山清氏が発掘した住吉大社の碑文によつてはじめて実証されたのではないか。

奈良県大和郡山市に住む児玉富代氏と兵庫県西宮市に住む森山照美氏はそれぞれ古引網石田一統の末裔に属するが、七月初旬、かねて依頼していた住吉大社の件の石

灯籠の碑文等について、兩人より次のような詳報が寄せられた。それによると、同社域には、全国各地から寄進された石灯籠が六百余个も林立しているという。

一 児玉氏よりの提供資料

192 193 H 東基 永代常夜灯

願主 大阪新天満町 天満屋七郎兵衛

延享三丙寅年九月吉日

世話人中晞干浦

石田吉左衛門 192 193 H

石田吉良兵衛

石田善右衛門

石田治兵衛

石田松五郎

石田弥太夫

石田恣大夫

石田吉郎兵衛

石田五三郎

石田吉次郎

二 森山照美氏よりの提供資料

石田吉次郎 192 193 H

石田吉良兵衛 192 193 H

石田五三郎 〃

石田治兵衛 〃

石田善右衛門 〃

石田弥太夫 〃

石田松五郎 〃

石田 大夫 〃

定吉 118 119 E

庄七 135 136 F

庄兵衛 〃

この二つの資料から推察すると、石田姓一統は、192 193 Hに区分され、無姓の定吉は118 119 Eに、また庄七は135 136 Fにそれぞれ区分されて刻名されているが、これが一基の中に区分されていることを意味しているのか、または基別の区分を意味するのか不詳で、基別とすれば三基になる。

晞干浦地藏庵には、元禄十四年以降当庵が関与した葬送者の戒名、喪主との続柄、物故時の年齢等を詳記した過去帳が伝わっている。この過去帳によって、住吉大社の石灯籠に刻名されている人名を調べると、昔は襲名や

改名が多く、全員の確認は困難であるが、石田一統十名は、当浦の西域に住む石田姓一族の先の人々であったと推定される。

この庵域南側大字二栄（明治六年頃晞干浦と古江浦が合併した時につけられた浦名）五一七番地は、この石田一族の私有墓地であるが、今もこの墓地には、この一族の墓碑が十数基建っている。その中に仏像型の碑石をいただいた墓石二基が見える。

その一基が石田弥太郎を祖とする石田松五郎、石田善右衛門等一統の碑石と推定され、他の一基が同族の石田吉左衛門、吉次郎、吉良兵衛等一統に関係がある墓碑と推測される。

この二基は、かつては庵の南側に並び建てられていたが、弥太郎を祖とする一基は、今は墓地の東隅に移されている。

昭和十二年十月、日支事変勃発当時、晞干浦の区長を務めていた平井栄作氏が、その子息栄氏一戦病死による墓碑を造営せんがための仕業であったという。そのため碑文が刻記されていた台石が遺棄されているが、過去帳によると、今もこの碑石を先祖の墓と崇めている一統は

本家と称される石田峯太郎家より分家した石田作太郎、石田常吉、石田善四郎一（石田善右衛門が直系の祖）石田喜助、石田松太郎、石田倉藏等の各家につらなる後の人々である。中でも本家に最も近いのは明治・大正・昭和初期まで古引網の経営を継承していた石田作太郎家である。明治六年死亡したこの一族石田弥平治の墓碑に次のような碑文が刻まれている。

石田君通称弥平次其ノ先ハ防州ヨリ出ヅ。世々吾佐伯上浦ニ居リ、漁ヲ以テ業ト為シ沿浦ノ豪族ナリ。高曾祖ヲ某ト云ヒ父ヲ丈介（善右衛ノ子）ト曰フ。君ハ其ノ第二子ナリ。

父嘗テ産ヲ失ヒ家資殆ンド尽ク。君其ノ兄三代儀兵衛ト奮励未タ数年遂ニ其ノ産ヲ復ス。父其ノ産ヲ分チ之ヲ支封ス云々

この碑文によってもこの一族が防州より晞干に移住し豊かな佐伯湾の漁場に着眼して世々漁業を経営して繁栄していた事情が察せられるが、この一族は、後に八幡丸という廻船業をも兼営して大阪等の魚問屋と交易した。それを実証する次のような資料が発掘された。

廻船売買確証

一百四拾五石積 八幡丸 廻船老

但シ乗出俣 別紙絵図面之通

此代金貳百拾五円也

右者ハ我等所有之廻船 前頭之通貴殿工売渡即代金不残正ニ受取候処確実也 然ル上ハ右船ニ付他方ヨリ違乱妨申者無御座候、萬一故障出来候得者拙者罷出屹度埒明シ聊モ御迷惑ヲ相懸申間敷候段、後日廻船売渡確証依テ如件

明治十三年二月十四日

南海部郡二栄浦石田儀平（儀兵衛）

大坂府下西成（城？）郡西側町

淡路嘉二郎殿

この古引網一族は、明治初期に対州まで出漁した形跡が残されており、四代目石田与三郎は、明治十二年その地でコレラに罹り死亡したと伝えられている。

なお、この一族は、五代石田作太郎も古引網を継承し明治三十六年（一九〇三）朝鮮元光武五年頃には日本海に面する朝鮮海まで出漁した。これを実証する当時の釜山港通商事務阿（所）より発給された釜山海関遵照允准日本漁船捕魚執照（許可証）が石田主計家（石田作太

郎後) から発見された。

それによると、捕魚許可領域は全羅慶尚、江原咸鏡地方海浜三里(日本に換算三十里)

一、捕漁従事船 五艘

一、五艘の総船主 大分県南海部郡西上浦村

石田 作太郎

一、各船の船頭及船の長さ搭乗人員

1 石田作太郎 (三丈三尺) 三名

2 石田常吉 (三丈四尺五寸) 九名

3 石丸仙太郎 (三丈四尺五寸) 九名

4 亀山長佑 (二丈二尺五寸) 三名

5 渡辺保吉 (二丈九尺七寸) 五名

なお、裏面には、これ等の許可条件が英字で綴られている。また、船主であった石田作太郎家には、最近まで間口三間、奥行二間、高さ二間程度の塩納屋と称する古い建物が残っていたが、住吉大社の碑文と重ね考えると古引網一統は、漁獲した魚に塩を施して大阪方面の魚問屋と交易していたのではないか。

石田吉左衛門、同吉良衛門、吉次郎関係の墓碑について、この一基には、天保七年三月に物故し、この墓碑に

埋葬された母の戒名等が刻られているが、その喪主は石田吉兵衛と刻記されている。過去帳によるとこの墓碑が住吉大社の石灯籠に記名されている、石田吉良兵衛、同吉次郎等に深い係累があるものと推察される。また、この墓碑には、安政二年(一八五六)九月死亡した石田定右衛門が葬られているが、過去帳によると、この人物は後に善右衛門と改名している。

この過去帳には、善右衛門を名乗った人物が三人載っているが、その中の二名は、いずれも本家と称される石田峯太郎家の分家筋にあたる人々で、そのうちの一人が住吉大社の石灯籠に記名されている人物である。後にその名を慕って善右衛門と改名した。この定右衛門家は、本家と極めて近い間柄であったと推測され、その先は古引網を、もやいで経営した一族と思われる。

なお、この後裔には、定右衛門を襲名し、後に定右武と改名して、明治十二年から約二年間、狭域村制時に二栄浦戸長(村長)を勤めた人物が輩出している。過去帳によると、その後継は理右衛門とあるが、今はこの墓碑を祭る直系の家系は絶えて、弘化三年死亡した石田吉良衛門を開祖とする石田津磨吉の後裔が祭っている。

宝永五年八月（一七〇八）浅海井浦赤坂仁兵衛が残した『御假日記録』には、この時期浅海井浦と晡干浦との間に「立てばゑ」「たての河原」等の野地畑、新開地並びに「浪太崎（鼻）」「ひろはゑ」（後の新網代の意ではないか）等の網代に関する紛争が起きた事件について詳細に綴られている。

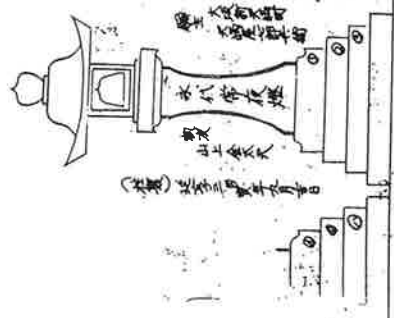
過去帳によると、この文中に載っている晡干浦側の当事者吉右衛門、理右衛門等は、この墓碑に刻記されている石田吉兵衛の先祖に当たる人々と推定される。従ってこの両名は、延享三年（一七四六）に住吉大社石灯籠を寄進した石田一統の先でもあり、この頃彼等は古引網を経営し、佐伯領内の沿浦に於て其の勢威を誇っていた時期と推察される。

この時、紛争の対象となったと察せられる「たてばゑ」「たての河原」の一部の畑は、今に至るもその系統（石田作太郎、石田常吉）の後裔が耕作を続けている。

『鶴藩略史』によると、安永三年（一七七五）五月、江戸の柳沢大炊介が佐伯領内九箇所の主な漁場にそれぞれ蛭子像を献じて豊漁を祈願したとあるが、その筆頭に浪太崎（鼻）が選ばれている。

古引網を経営した石田姓一統が、佐伯領四二浦の網方中の世話人となって住吉大社に豊漁祈願の石灯籠を寄進した延享三年（一七四六）を距ること約三十年後の事件であつて、古引網が最も繁栄していた時期と察せられるその位置の撰定基準には頷ける節が感ぜられるのではないか。

次に森山照美氏の調査によると、この時期に住吉大社に寄進された石灯籠別区画 E に希干浦定吉、F に庄七庄兵衛と記名されているという。過去帳によつては確認出来ないが、同浦正八幡社に元禄十五年奉納されている木簡には庄大夫庄兵衛という記名があり、また元文二年（一七三六）の木簡には庄屋庄右衛門と記名されている姓が記されていないので、今のいずれの家系に属する人々か確認は不能であるが、かつて同浦東に長浜姓でその名に「庄」をつけた一族が住んでいた。その一統の先祖であろうか。

[illegible]

書卷
（②）
在野火中
石田屋前
吉吉吉
松本太郎
森久夫
馬三郎
吉三郎